

行田市民大学 第5期生 環境グループ

テーマ : 「忍川・さきたま調節池（旧忍川）の自然環境の調査・研究

<http://oshi.html.xdomain.jp/report/default.html>

柱 B : 忍川・さきたま調節池（旧忍川）の歴史と自然（前半）

1 地域の河川等のようす

行田市地域は荒川新扇状地の末端にあり、北は群馬県との境を流れる利根川と南には荒川の流に挟まれた地として河川が多く治水では課題の多いところである。古くは奈良時代に中期から全国的に行われた条里制の「熊谷・行田条理」があり、その広さは東西約6km、南北約5.5kmといわれ、荒川水系の流域中最大規模の条理だった。この地は戦国時代初期である15世紀後半に築城された忍城を中心とした忍藩領として栄えた。領内には扇状地を乱流として流れる河川が複雑に入り組む地であり、河川および沼などの治水事業に苦心した土地柄でもある。地域内には星川と忍川、利根川に合流する福川、それに付随する用水などがある。用水路として主なものは北河原用水、見沼代用水、酒巻導水路、武蔵水路、埼玉用水路などがある。これらの用水路は、最も古い正保元年（1644）に開削された北河原用水路から新しい武蔵水路まで、主に周辺・下流域の利水事業に用いられている。さらに東部の忍川・旧忍川と見沼代用水に囲まれた、現在の古代蓮の里と県行田浄水場のあたりには「小針沼」と言われた広い沼があった。



2 さきたまの津の存在

「津」というのは港や船着場のことである。内陸であるさきたまの地に置いては川に開かれた港を指している。さきたま古墳群の小雨群山古墳は6世紀につくられたが石室に房総石が使用されていること、鴻巣市の生出塚の窯で焼かれた埴輪が、埼玉古墳に使用されたのを始め、河川の流域に沿って各地に分布していること、万葉集の十四巻に所収されている相聞歌には「さきたまの津」に居る船のようすが歌われている。これは、舟運が古代から利用されていたことを示している。現在「さきたまの津」の場所については元荒川流域の築道下遺跡、旧小針沼沿岸の小針遺跡が推定され、忍城主の阿部正充が小崎沼を「さきたまの津」として歌碑を建てさせている。

「さきたまの津に居る舟の 風をいたみ 綱は絶ゆとも 言は絶えそね」

これは

「さきたまの津に吹く風が強いので、舟をつないでいる綱が切れそうだ。舟の綱は切れようとも、私への言葉は絶やさないでください」という意味だ。天智天皇の時代、さきたまの津から防人として船に乗って九州へ旅だった男性の便りを待つ女性の歌のように思われる



小崎沼



石灯籠（前玉神社所蔵）

万葉歌碑（行田市）



熊谷市鎌倉町・星溪園「玉ノ池」

3 忍川の歴史と景観

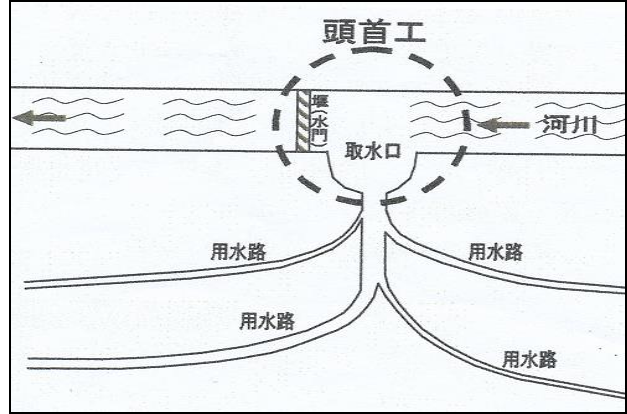
(1) 水源は星溪園から荒川の六堰へ

忍川の元をたどると熊谷市内を流れる星川に行き着き、水源は熊谷市鎌倉町にある星溪園の「玉の池」である。この池は元和9年（1624）に荒川の氾濫でできた。清らかな水が湧き出るところから「玉ノ池」と呼ばれるようになった。この豊かな湧き水で熊谷東部や行田市・鴻巣市に広がる水田地帯を潤していたが、昭和30年代には少しずつ湧水が枯れてしまい、農業用水の不足に悩むこととなった。

そこで、農林省直轄事業、荒川中部農業水利事業（昭和35～41年）が行われ、荒川の六堰頭首工から農業用水を導水し、「玉ノ池」の湧水とともに下流を潤した。しかし、さらに「玉ノ池」の湧水が減少してきたことにより、農業用水も減少してきた。

熊谷市と農林水産省はアメニティ空間の整備構想と農業用水路の改修が同時期に計画されたことから、協議を重ね、平成8年に共同工事として星川の整備に着手した。現在の水路を流れて

いる水は、六堰頭首工から取水した農業用水である。水路の下には口径1,200mmのパイプが埋設されており、この中にも農業用水が流れている。農林水産省は六堰頭首工をはじめ熊谷市を含む4市にまたがる農業用水施設が、荒川の河床低下、都市化による農地利用の変化、農業用水の水質悪化等の問題が出てきたことから、六堰頭首工、星川を含む農業用水路の改修を計画し、用水施設の機能回復と災害の未然防止、農業用水の水質改善を図ることとし、平成18年度に完成することとなった。



荒川・六堰頭首工

(2) 荒川・六堰頭首工からの水の取り入れ

① 頭首工とは

頭首工とは、河川に流れる水を農業用水として用水路に引き込むために設ける堰や取り入れ口をまとめたもの。用水路の頭に設置される施設であることからこの名称で呼ばれる。

② 六堰頭首工の役割

六堰頭首工は、主に水稻を育てるために、荒川から水を取り入れて水田に送る役割を担っている。熊谷市を中心に行田市、深谷市、鴻巣市のおよそ3,820haの地域の水田に農業用水を供給している。



③ 大里用水400年の歴史

A 大里用水の始まり

大里用水の歴史は古く、豊臣秀吉から関東に国替えを命じられた徳川家康が家来の「伊奈備前守忠次」に命じ、江戸周辺の穀倉開発によって、慶長7年（1602）に現在の熊谷市と旧川本町（現深谷市）の境界付近で荒川を堰き止め、米を作るのに必要な農業用水を取るために「奈良堰」を作ったのが始まりといわれる。その後、十数年で約5kmの間に「奈良堰」から荒川左岸下流に向かって「玉井堰」、「大麻生堰」、「成田堰」、右岸に「御正堰」、「吉見堰」の六つの堰が作られた。元和元年（1615）「伊奈忠次」が荒川に「成田堰」を設けた。これは他の五つの堰の最下流、大里郡広瀬村に設けた。この六つの用水の総称を「大里用水」といった。かんがいに使用した水は再び集めて反復利用する方法をとった。これを「伊奈流、関東流」という。

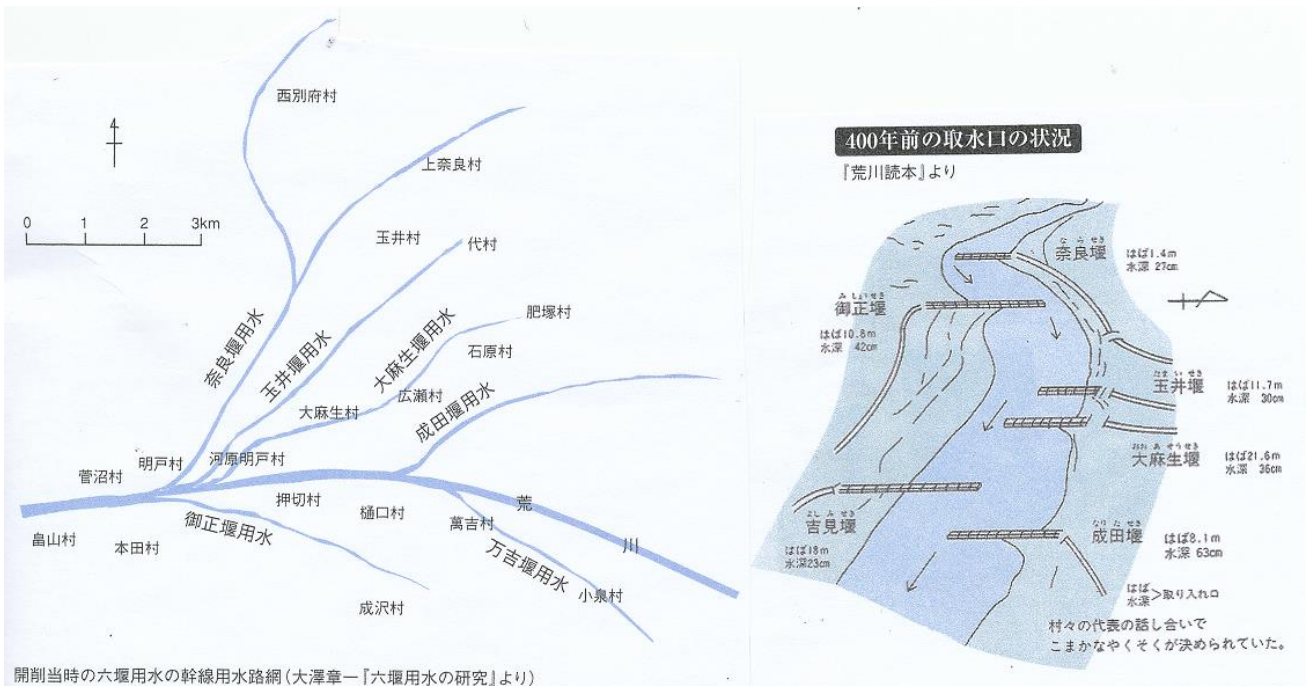
B 水争いと洪水の苦難苦闘の歴史

荒川は、日照りが続き、雨が降らないと極端に水が少なくなる。上流にある堰で水を取ってしまうと、下流の堰では水が取れなくなってしまうため、六つの堰の農民たちの間では、田植えのための水争いが絶えなかった。また逆に大雨が降ると、荒川に流れ込む水が増え洪水となり、その度に堰が流され、作り直さなければならなかった。

C 六つの堰が一つに、悲願の「六堰頭首工」誕生

水争いや、洪水に度々悩まされていた六つの堰の農民たちは、問題を解消させるため、大正末期に、「大里用水路関係六箇水利組合連合」を結成。大里用水路関係六箇水利組合連合は、大正15年6月に既存の六つの堰を統合する改良事業の施行を県に申請し、昭和4年度（1929）から「県営用排水路幹線改良事業大里地区」として県が施行した。

そして、昭和14年（1939）に旧花園町と旧川本町の境界近くに六つの堰を統合した「六堰頭首工」が作られた。



D 壊れてしまった旧六堰頭首工

約60年が過ぎた頃、「六堰頭首工」と左岸から右岸に水を送る「江南サイフォン」は河床低下や老朽化が進み、洪水で流される危険があった。そこで国と埼玉県と地元市町村が協議し、新しい六堰頭首工を作ることになった。農林水産省が、「国営大里総合農地防災事業」で改修工事を進めることになった。しかし、その新しい六堰頭首工を建設している途中の平成11年8月14日、大雨の影響で荒川の水量が急激に増え、六堰頭首工の固定堰の一部が壊れ、流さ

れてしまった。

E 生まれ変わった六堰頭首工「平成の大改修」

苦難を乗り越え新しい「六堰頭首工」は、平成10年から平成14年度までの5年間をかけ平成15年3月に完成、農林水産省関東農政局により「国営総合農地防災事業」として建てかえられた。この事業は平成6年度～平成18年度の工期で総事業費405億円をかけて実施され、取水された用水は、熊谷市を中心とする水田3,820haにかんがいされている。内訳は熊谷市3,080ha、行田市350ha、深谷市270ha、鴻巣市120haである。

(3) 忍川の歴史と景観

① 忍川の流路変遷－1

中世あるいはそれ以前の古い時代には、忍川の流路は乱流して不定であり、星川の派川だった時代を経て、流路は次第に荒川の派川へと移行したと思われる。現在、忍川の近傍には前谷落という農業用水路が存在し、これは持田付近からはじまり、南流して鴻巣市鎌塚一丁目で元荒川へ合流している。前谷落は忍川の旧流路である古川の跡を改修したもの。この間の微高地は往時の忍川が形成した自然堤防だと思われる。熊谷市から行田市にかけての地域は、荒川扇状地の扇端部に位置しているので、古代から中世までの非常に長い時間をかけて荒川で大洪水が発生するたびに、洪水が流下した跡で新たな派川が形成されていたと想像できる。

戦国時代には、忍城主の成田氏によって星川の水が忍城外堀の忍沼に導水されている。これは新規に水路を開削したものでなく、星川の派川跡を改修したものと思われる。

近世になると、熊谷市に始まり、忍沼に流れ込むまでの区間が「かみ忍川」、今でも忍沼川に当時の片鱗がわずかに残っているが、忍沼から流れ出て長野地区で一つに合流し、行田市郊外の見沼代用水へ合流するまでの区間が「しも忍川」と呼ばれた。「しも忍川」は昭和初期に実施された河川改修によって廃川となった。

② 忍川の流路変遷－2

今の忍川は、もともと持田地域から忍沼に流れ込む川や、持田地域一帯や前谷地域の水田を潤す古川等から分水した細流であった。今でもその面影が見られるのが杣殿堰からの忍川用水路である。昭和7年に忍川が開削され、その後に杣殿堰ができる以前には、実は熊谷市街地からの忍川が一筋のみだった。この流れは持田の「料亭丸岡」西側の方面に主な流れがあった。

古老の話（持田在住84歳男性のTさん）

現在、熊谷市と行田市の市境付近の杣殿分水堰からの忍川用水下流30m付近の八幡神社裏手に明治37年竣工の煉瓦造りの杣殿樋管橋がある。「この煉瓦造りの樋管橋から八幡神社北側を通して細い流れながら分水した流路があった。この流路は小敷田と持田の境を一筋流れていて、持田の宝蔵寺付近までであった」という。

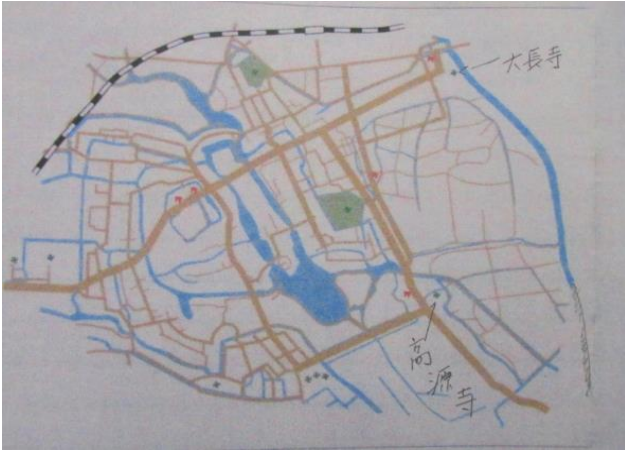
「煉瓦造りの樋管橋には観音開きの水門が取り付けられていて、河床の高い古い忍川側から土地の低い神社北側には水の流れが溢れがらだったので、この水門で自動的に堰き止めていた。」

「忍川が別に新しく掘られたことに関連で杣殿分水堰が新設された頃、幼少の自分は祖父の背中に背負われて見に行ったことを覚えている」とのことだった。

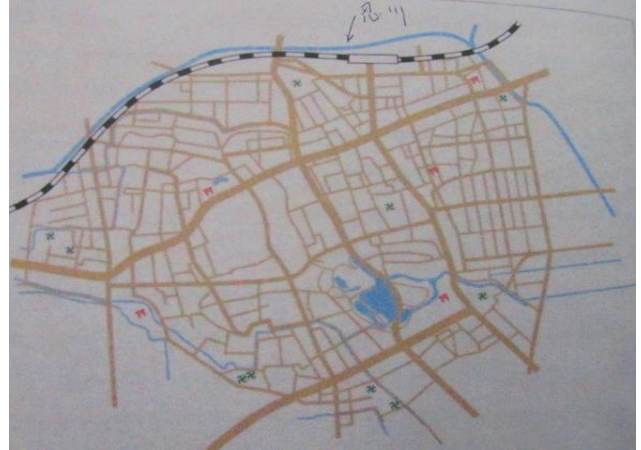
「また、八幡神社北川方面には行田市小敷田と熊谷市上之の市境があり、そこには利根川方面に向けて忍藩の殿様が築いた土手が延々と築かれていた。大水が出たときにはその土手で水が堰き止められ、忍城側には水が来なかった。」と話された。

現在は昭和9年竣工の杣殿分水堰を経て、古い忍川の流れの北側20m程に、昭和7年頃に新しく川幅も広く深く開削された忍川に流路が変更された経過がある。今は、稲作シーズンに六堰頭首工で取り入れた農業用水はこの杣殿分水堰で流れを堰止めて忍川用水として持田、前谷方面に導水している。昭和7年頃に杣殿分水堰で忍川に流路が変更される前の忍川と後の忍川の比較

できる地図を次に掲げる。左の昭和初期の地図では、地図の上部の忍川がないことが分かる。



昭和初期の地図



現在の地図

行田市内で忍川が大きく南に曲がる付近にある花見橋に流れ込む川は、利根川に流れ込む福川から取水する、昭和7年竣工した農業用水の「酒巻導水路」であり、途中で市郊外の北部を流れる星川の水と合流しながら、ここで忍川に注ぎ込んでいる。途中「玉野用水分水堰」があり、「下長野用水」や「さきたま用水」へと分水している。また平成21年度には水辺再生100プラン整備工事により、水辺に親しめる岸辺となっている。



熊谷市平戸・忍川の管理基点



古い忍川からの分水用煉瓦造り樋管橋



杣殿分水堰（左が忍川、右が忍川農業用水）



杣殿分水堰から忍川下流を望む

③ 花見橋と桜

忍川の流れは、行田市に入って東に向かう。また、酒巻導水路の流れは行田市の中央を南へ進む。この二つの川は行田市のほぼ中心で交わる。そこで忍川は流れを大きく南へ変える。酒巻導水路は利根川水系の福川を水源とし、忍川は荒川を水源としている。この場所の酒巻導水路側には、「花見橋」がかかっている。この花見橋は素晴らしい。橋の欄干が桜の花びら模様で出来ている。また、花の中心のおしべには、ひっそりと行田市の市章が埋め込まれている。橋の欄干全体が桜と同じ薄いベージュ色で、デザインと色彩がよく似合う。花見橋という名の橋は、他の地方にもあるが、欄干までが桜模様の橋はない。花見橋から忍川の上流の谷郷橋まで、また、酒巻導水路の上流の玉野用水との分岐点までは桜が植えられている。昭和40年頃までは、花見橋から行田市駅の北側の桜は市の代表的な花見場所だった。桜の季節には夜昼ともたくさんの見物人で賑わった。しかし、忍川の改修で行田市駅の北側の桜は一度なくなった。現在は、新しい苗木が植えられているが、幼木で花見はできない。花見橋の下流は、大長寺の横および老本幼稚園から警察の先まで桜並木となっている。



花見橋と秩父鉄道鉄橋



忍川の桜並木

花見橋からは忍川を渡る小豆色の秩父鉄道の鉄橋が見える。これも、この場所を特別な場所にしている。ただ、桜の木の近くに住む人にとっては、落ち葉や虫の悩みも大きいようだ。

④ 新忍川への流路変遷－3



旧忍川の分流口付近、上は玉野用水

旧忍川分岐点より先の忍川は、新忍川とも呼ばれる。ここから先は、昭和7年に元荒川および支派川の県営改修事業の一環として開削されたものである。かつて忍川は行田市長野から小針方面に流れ、やがて見沼代用水に流れ込んでいたが、昭和初期の河川改修によりこの流れは廃川となった。廃川となって旧忍川となった川に替わって、昭和7年頃には新たに南に流れる川を広く深く開削し、接する鴻巣市を流れる元荒川につないだ。本が戦争へまっしぐらの時代、経済的には、昭和4年の世界恐慌、5-6年の昭和恐慌の時代で、犬養内閣の蔵相高橋是清が積極財政、軍

拡、インフレーション政策を取った時期である。第二次安倍内閣のインフレーション政策のモデルになった時期でもある。

この新忍川は、昭和 30 年頃まで、地元では、大川、支派川と呼ばれていた。川の工事が終わった昭和 8 年には忍川は一級河川に指定され、その管理は県土に移った。忍川を南方向に歩いて、行田中学を越えて 400 メートル程進むと、川幅が急に狭くなる。ここまでの川幅は昭和 40 年過ぎに発生した台風による忍川の氾濫を教訓に広げたものだ。ここから先の狭い川幅が、かつての忍川の川幅だ。

現在では、大雨により忍川が増水した場合に、忍川の水を武蔵水路に排水するための佐間水門がここにある。これにより大雨時に水流が減るので、ここから先の川幅は狭くなっている。



川幅が急に狭くなる



大雨時に武蔵水路に排水する佐間水門

この先の区間には現在 13 もの橋が架けられているが、そのうち樋上①②橋と堤根①②、前屋敷橋等が英国や米国から輸入した鉄道の古レールを再利用したアーチ橋、青柳橋等がラーメン橋台橋である。

レールの刻印からこのレールは輸入品と分かるという。交通需要増大によるレールの大型化などのために余った輸入古レールを使用したものや、同様の中古レールを海外が輸入したものらしい。「古レールのアーチ橋」(<http://www.geocities.jp/fukadasoft/bridges/rails/>) によると、これらの橋が作られたのは、昭和 8 年といわれる。川の開削が終わると直ぐに作られたことになる。



樋上 1 号橋
(橋名の表示はない)



樋上 2 号橋
(橋名の表示はない)

上の二つのアーチ橋は構造的に似ているが、アーチのカーブが違っている。橋の欄干のデザインも違うが欄干の低さはいずれも同じだ。

次の青柳橋は、コンクリート橋だが、細かな部分に装飾がある。この装飾が時代を感じさせる。橋の下の川底の凹凸で流れが乱れて水に酸素が供給されるためか、橋の下に水草が多い。橋には、新忍川と表示されている。



青柳橋



青柳橋の装飾

次の堤根1号橋と堤根2号橋は、同じデザインのアーチ橋だ。パイプの白い欄干も同じだ。



堤根1号橋
(橋名の表示はない)



堤根2号橋
(橋名の表示はない)



堀切橋



堀切橋の装飾

上の堀切橋は、石田堤の直ぐ先にある石橋である。デザインが奇抜なコンクリート橋である。欄干には、アーチ型や三角形のスリットが入っている。欄干の柱には、動物のオブジェらしきものが乗っているが、古いもので形がわからない。この近くには戦国時代に石田三成が忍城水攻めのために築いた石田堤が残存しており、その時に決壊した場所がこの堀切橋付近である。



堀切橋より上流を望む



前屋橋

次の前屋敷橋は、忍川最後の橋で、やはりアーチ橋である。この橋は埼玉県が水質検査を行っている橋である。この橋の下の水の水質が忍川の水質としてインターネットで公開されている。この橋を越えると忍川は、100メートル程で元荒川に合流して終わる。

(4) 旧忍川（さきたま調節池）の歴史と景観

① 分岐点～丸墓山古墳付近

花見橋から南へ約2km 忍川を下ると、右側に旧忍川の分岐点がある。忍川本流との分岐点では旧忍川と忍川の川底とで、旧忍川の川底の方が高く、豪雨等で水位が上昇しない限り旧忍川への水の流れはない。この分岐点では玉野用水が掛樋になり、その下に流れ込む構造になっている。また、武蔵水路下は伏越しで流れるようになっている。旧忍川は享保年間（1730年頃）に開削された人工用排水路であり、自然河川ではない。忍沼や小針沼の排水路として雨水や氾濫水を見沼代用水へ放流する目的で掘られたと思われる。旧忍川の中下流部には今も数カ所に旧堤防が残っているが、それらの起源は小針沼の干拓のさいに、沼への流入水を遮断する堤として築かれたと思われる。また、経済的には、享保の改革時代の米の増産と舟運改善を目的にした政策と考えられる。現在、旧忍川の河道はさきたま調節池として再開発されていて、周辺地域の洪水調節を担っている。

旧忍川の取水口から旧忍川に入ると、200メートル程で武蔵水路に突き当たり逆サイフォンで武蔵水路の下をくぐる。旧忍川の周辺は、サイフォンを通過すると、すぐに埼玉古墳公園の横に出て、広大な公園広場と丸墓山古墳が見える。優美な景色が続く。歴史遺産や文化財といえる建造物も多い。

旧忍川には丸墓山古墳の北側に歩行者の専用の木の橋が架けられている。木の橋の右岸に祀られた庚申塔は寛文7年（1667）建立であり、行田市で2番目に古い庚申塔である。

手前の阿弥陀如来の付いた石仏は

延宝元（癸丑？）

天（1673年） 岸海上人と読める。

2番目の三猿の像の下に雄雌の鳥がいる庚申塔は

寛文七（丁未）年（1667年）

と読める。

3番目は天和三（癸亥）暦（1683年）と読める。

これらの石仏は、以前は丸墓山の上にあったらしい。この石仏を丸墓山の上に建てる理由はどのようなことだったのか。石仏のできた年代は、忍城水攻めの70-90年後のことである。



古墳公園広場と丸墓山



庚申塔

② 稻荷山古墳付近～共栄橋～ふるさと橋付近

ここを過ぎて丸墓山の横から後ろに回り古代蓮の里へと続く赤褐色の遊歩道を進む。ここは埼玉古墳群の裏側にあたり、夕景が美しいところだ。



埼玉古墳群の夕景

さらに進むと群生した葦が少し開けて、水辺が池のように大きく広がる場所がある。この付近の川幅は広くて約80mあるが、ここに架かった橋が共栄橋である。橋長は約7mと狭い。水の流れは止まっているが水量も多く、「水辺再生100プラン整備工事」で造られたデッキからは野鳥等の観察ができる。後ろに古墳が見えて景色が良い。



共栄橋から古墳を眺める

道が古代蓮の里に大分近づいたところで、左岸遊歩道に河畔に降りる階段があり、その下に塞神の石塔「弁才天」が祀られている。その先には、「辯天門樋」がある。これは左右非対称型煉瓦造りの水門であり、右岸から見ると水面に映る姿が美しい。右岸には農業用水用の揚水機場がある。付近には長野落バイパス水路が設けられ、埼玉県行田浄水場内遊水池との間で水位の調節が行われている。



弁才天



辯天門樋

ここで、いったん古代蓮の里の交差点に出てないと、川下に回にまわれない。川下に戻って少し歩くと小針クリーンセンター、行田市粗大ごみ処理場の裏を通る。単調な畦道が続く。

小針クリーンセンターを抜けると、行田浄水場の水を鴻巣方面に送る水管橋がある。アーチ補剛形式の2本の直径1メートル以上の水管が旧忍川を横切る。ここを通りすぎると、ふるさと橋に着く。なんとも懐かしい名前であるが、2007年に作られたばかりの行田市と鴻巣市の境界の橋である。橋の上に立って振り返ると、これまで歩いて来た道が一望できる。